



「寿式三番叟」

旭座人形芝居保存会

能の「翁」を人形浄瑠璃に取り入れ、景事物として上演する儀式の舞が「寿式三番叟」です。旭座では、お米や

お茶などの収穫に対する五穀豊穰と、息災延命を願い、毎年1月20日の「初光り」と、7月15日の「翁渡し」による「座渡し神事」が継承されています。

右手に神鈴、左手に扇子を持ち、杵時きをイメージした躍動感あふれる動きで四方を清めます。黄金の稲穂が垂れるよう篩から次々と杵を蒔きながら、くまなく舞台を駆け回り、皆様のご健勝とご多幸を祈念します。



「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段

八女市立黒木小学校人形浄瑠璃クラブ

阿波の国・徳島藩で、名刀・国次が何者かに奪われる事件が起きる。藩士・十郎兵衛は、この刀を取り戻すため、盗賊銀十郎として、女房のお弓とともに浪速に住んでいた。その上、夫の十郎兵衛は、今日中に五十両の金子を用立てなければならない事情にあった。

ちょうど、金策で夫が留守のところへ、巡礼姿のかわいらしい女の子がご報酬に訪れる。お弓が身の上を聞くと、国は阿波の徳島、父の名は十郎兵衛、母はお弓と答えた。それは紛れもないわが娘、お鶴だったのだ。

お弓は娘に災いが及ぶことをおそれ、母と名乗りたい気持ちをぐっところえるが、お鶴は「小さい時に別れて親の顔もはっきりと覚えがなく、よその子たちのように、母さんに髪を結ってもらいたい」と泣き出してしまふ。お弓も涙をこぼしながら、お鶴の身を案じ、徳島へ帰るように諭す。そんなお弓に、「あなたが母さんのように思えてきました。何でもしますからここに置いてください」とお鶴は懇願するが、置いてやることはできない。お弓が帰りの旅費を渡そうとすると、お鶴は小判を持っているので心配ないと告げる。わが娘のいじらしさに打たれ、自分の簪で髪を結い直し、泣く泣くお鶴を送り出したお弓。しかし、このままでは二度と会えないと、連れ戻す決心をしてお鶴の後を追いかけていくのだった。



「壺坂観音霊験記」山の段

旭座人形芝居保存会

原作者未詳の『観音霊場記』に、2世豊沢団平・加古千賀夫妻が加筆・作曲し、1879年に大阪大江橋席にて初演された。

(あらすじ)

大和国・壺坂に住む盲目の沢市は、女房のお里の内職を助けにつつましく暮らしていた。お里が毎日明け方に家を空けることに気付いた沢市は、女房が間男と不義をはたらいているのではないかと疑いをもち、お里を問い詰める。驚いたお里は、夫の目が見えるようにと、每晚裸足で観音様にお参りし3年になるのだと打ち明けたのだった。これを聞いた沢市は涙を流し、貞節な妻を疑ったことを詫言、二人で観音様へ参詣することにした。

(公演ここから) 観音堂へ着いて御詠歌を上げたあと、沢市はここで三日間断食をするので、お前は家に戻り用事を片づけてくるようにと言う。沢市の信心を喜んだお里は、お堂の左手は深い谷になっているので、決してここから動かぬように、と言いいて家に帰っていった。

一人になった沢市はどっと泣き伏した。お里には苦勞ばかりかける上、3年も信心してくれたのに何のご利益も現れない。自分がいないほうがお里のためになる、と思った沢市は、お堂を出ると深い谷へ身を投げてしまふ。

胸騒ぎを感じて引き返してきたお里が、沢市を呼べどもどこにも姿がない。お堂を出て捜しまわると見覚えのある杖が。ハッと驚き谷底を見ると、月明りの下に夫が倒れているのが見えた。ああ、夫は死ぬ覚悟であったのか、そうとは知らずここまで連れてきてしまった、と歎き悲しむお里。盲目の夫があので迷わないようにと、後を追って谷に身を投げるのだった。

すると妙なる調べとともに観音様が現れ、お里の貞節と信心をたたえ、夫婦を生き返らせた。目が覚めた二人は、沢市の目が見えることに気付くと、観音様のおかげだとお礼を言い、踊りあって喜ぶのだった。

数百ある人形浄瑠璃の外題はほとんどが悲劇で、ハッピーエンドは3つしかないと言われています。奈良の壺坂寺は今でも眼病封じの霊場として有名です。

旭座人形芝居本公演 おたのしみ抽選会

- ご来場の方には演目の終了後、おたのしみ抽選会をおこないます。
- 応募できるのは公演当日の会場内のみです。
- 氏名を記入の上、演目が終了するまでの間に、会場内に設置した応募箱に投かんして下さい。(必ず、ふりがなを記入して下さい)
- 応募はお一人につき一枚までとなります。複数枚応募されても、2枚目以降は無効となります。
- 抽選時点で会場内にいらっしゃらない場合、当選は無効となります。

キリトリ線

応募券

(ふりがな)

(姓)

(名)